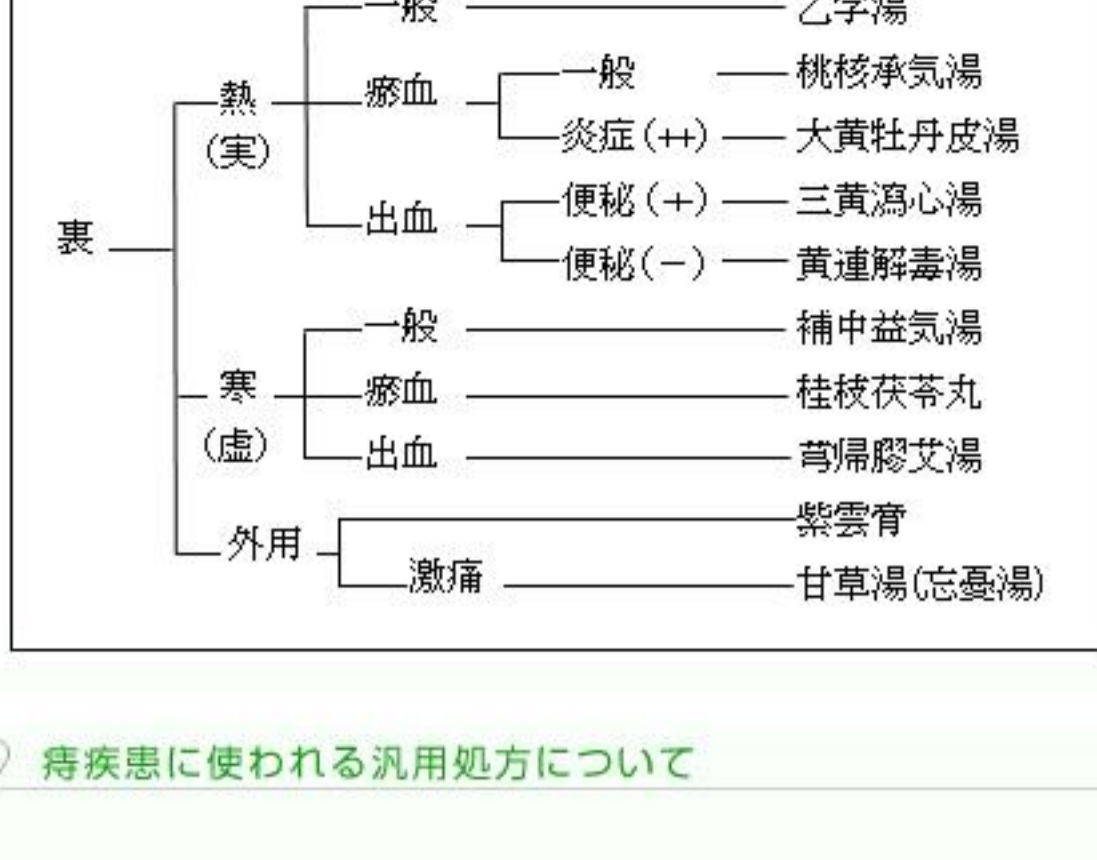


痔疾患と漢方療法

痔には漢方療法の薬がいろいろありますが、絶対的な外科適応があるときは手術を優先したほうが良いでしょう。

薬だけ飲んで痔を治そうとするよりも生活習慣の改善が第一です。お酒を控えるとか、ワサビ、カレーのような香辛料を控えるとか、お風呂で温めるとかすると良いでしょう。ウォッシュレットなどの普及により痔疾患は少なくなっているようです。



痔疾患に使われる汎用処方について

1. 軽症・中等症

乙字湯(オウジトウ)〔原南陽經驗方〕: 新鮮な痔の場合の第一選択薬であり、疼痛出血などを伴う痔疾の特効薬として繁用される紫胡剤と考えられます。薬方は当帰・柴胡・黄ごん・甘草・升麻・大黃です。大黃が入っていますので、大黃に敏感な人に処方すると下痢を起こすことがあります。乙字湯は痔の名方として百年以上の歴史があり、特に昭和の漢方復興期以降多様されて一般的にもよく知られるようになりました。原南陽の「叢桂亭医事小言」蔵方に記載されていた原方を浅田宗伯が若干の改良を加えて「勿誤藥室方函口訣」に載せた。宗伯の処方には南陽の原方から大棗と生姜を除き、当帰を加えた構成になっています。

※黄ごんの「ごん」は くさかんむりに今

2. 慢性例

桂枝茯苓丸(ケイシブクリョウガン)〔金匱要略〕: 痔を診てある程度古くなっていて、痔核が赤く腫れている場合に使うと3~4日で痛みが治まって腫れが引いて楽になるようです。薬方は 桂皮・茯苓・芍薬・牡丹皮・桃仁の五味である。桃仁+牡丹皮は共に協力してお血を除き、腫れを去り痛みを止める働きが強まります。

※茯苓の「きん」は くさかんむりに今

※お血の「お」は やまいだれに於

3. 便秘・疼痛例

桃核承気湯(トウカクジョウキトウ)〔傷寒論・大陽病篇〕: 便秘がひどい、痛みが強いような場合に駆お血剤(血の滞りを緩和する効果がある薬)として良いでしょう。薬方は桃仁・桂皮・大黃・芒硝・甘草の五味で構成されています。**桂枝茯苓丸**より駆お血作用が強く、比較的体力があり、便秘(大黃と芒硝は下剤)のひどい場合により効果があります。

※駆お血剤の「お」は やまいだれに於

4. 重症例

大黃牡丹皮湯(ダイオウボタンピトウ)〔金匱要略〕: 痔核や肛門周囲の炎症で症状が強く、便秘が強く、下腹部が強く張っている場合や肛門部が腫れて硬結状になってこの処方により痛みがなくなったとの報告がある。薬方は 大黃・牡丹皮・桃仁・冬瓜子・芒硝の五味。桃核承気湯は駆お血作用が強く、大黃牡丹皮湯は抗炎症作用が顕著です。

※駆お血作用の「お」は やまいだれに於

麻杏甘石湯(マキョウカンセキトウ)〔傷寒論・大陽病篇〕: 風邪を引いて熱があり、咳が出るお腹圧が高くなるので痔が痛むことがある場合に、非常に良かったとの報告があります。薬方は麻黄・杏仁・甘草・石膏で構成されています。

当帰建中湯(トウキケンチュウトウ)〔金匱要略〕: 激痛を伴う脱肛で痛みが非常に激しい場合に適している。薬方は当帰・桂皮・芍薬・甘草・生姜・大棗で構成されています。この内容は、**桂枝湯**の薬方、桂皮・芍薬・甘草・生姜・大棗に芍薬を増量した「桂枝加芍薬湯」に当帰を加えたものであり、脱肛の痛みの強い場合には第一選択薬としてよく使われます。痔による出血のため貧血を起こしてしまうような場合や、建中湯を使うような比較的体力のない場合の人の痔の痛みにも適用される。

温清飲(ウンセイイン)〔万病回春〕: 慢性化してきた場合に使うことがあります。薬方は当帰・川きゅう・芍薬・地黄・黄ごん・黄柏・黄連・山梔子で構成されている。これは**黄連解毒湯(オウレンゲドクトウ)**<薬方: 黄ごん・黄柏・黄連・山梔子>と**四物湯(シモツトウ)**<薬方: 当帰・川きゅう・芍薬・地黄>の合方である。もともと **黄連解毒湯**は呼吸器系(黄ごんは肺火を瀉す)や消化器系(黄?は大腸を涼す)の出血に使うことが多い(痔漏門: 治法出血を治すことを主として行なう)。温清飲は泌尿器系や婦人科系的な下半身の出血に使うことが多い。

※黄ごんの「ごん」は くさかんむりに今

※川きゅうの「きゅう」は くさかんむりに弓

きゅう帰膠艾湯(キュウキョウガイトウ)〔金匱要略〕: 婦人科出血によく使われる薬方ですが出血を止めるだけでなく、貧血を回復させる効果もあるといわれています。薬方は当帰・川きゅう・芍薬・地黄・阿膠・艾葉・甘草で構成されている。これは**四物湯(シモツトウ)**の加味方であるので胃腸の弱い人には地黄(ジコウ)が触るので注意が必要です。

※きゅう帰膠艾湯の「きゅう」は くさかんむりに弓

※川きゅうの「きゅう」は くさかんむりに弓

脱肛の漢方治療

1. 脱肛治療はまず第一に指で押えて還納することが良いようです。脱肛は漢方的には升降概念から降証に相当するので升性薬の適応となり、升性が著しいと言われる升麻が入った方剤である**乙字湯**(当帰・柴胡・黄ごん・甘草・升麻・大黃)、**補中益気湯**(人參・黄耆・蒼朮または白朮・柴胡・当帰・升麻・陳皮・生姜・大棗・甘草)が用いられます。**補中益気湯**は元気を補って気を増すということで著名な処方です。津田玄仙書にはこの使用目標として①手足がだるい ②言葉に力がない ③目に勢いがでない ④口に白い泡が出る ⑤食べ物の味がなくなる ⑥熱いものを好む ⑦へそにあたって動悸がする ⑧脈が大きくて力がないとの記述があります。補中益気湯を長期間服用すると体力がついて脱肛が軽くなると言われてます。

※黄ごんの「ごん」は くさかんむりに今

2. 女性は妊娠すると痔が悪化することがありますのでそれに備えて**当帰芍薬散(トウキシャクヤクサン)**(薬方: 当帰・川きゅう・芍薬・白朮・沢瀉・茯苓)を続けて飲んでしていると軽く済むと昔から言われています。

※川きゅうの「きゅう」は くさかんむりに弓

痔瘻の漢方治療

外科的な適応があれば手術を優先すべきですが、どうしても手術を好まない場合の漢方薬としては、以下の薬方があります。

1. **千金内托散(センキンナイタクサン) ***<薬方: 人參・当帰・黄耆・川きゅう・防風・桔梗・厚朴・桂枝・白?・甘草>が第一の選択剤と言われています。

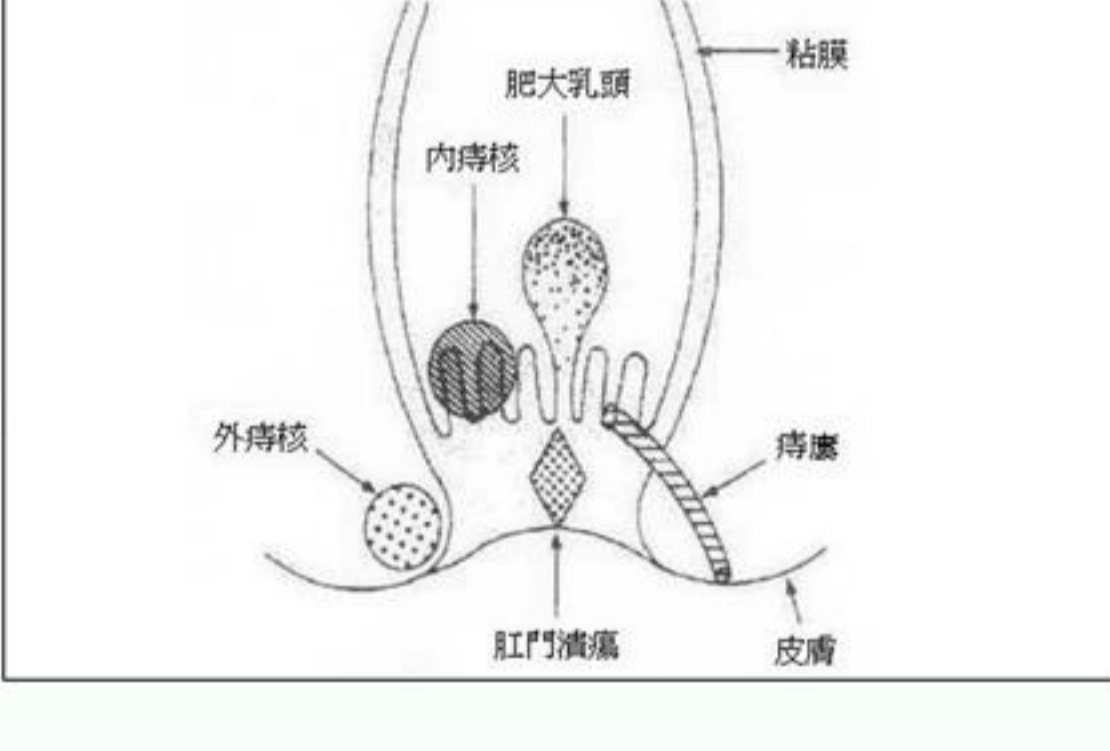
※川きゅうの「きゅう」はくさかんむりに弓

2. **十全大補湯(和劑局方)**は四君子湯と四物湯の合方に桂皮+黄耆を加えた処方で慢性に経過して治りにくく、貧血や衰弱の見られる場合の適応と言われています。

3. **帰耆建中湯(キギケンチュウトウ)**は当帰建中湯に黄耆を加えた処方で疲れやすく虚弱体質で化膿が治りにくい場合の適応と言われています。

4. **紫雲膏(シウンコウ)**は外用療法として広く使われます。薬方は紫根・当帰・ゴマ油・サラシツロウ・豚脂で構成されています。いぼ痔、切れ痔、脱肛を取める効果があります。

5. **忘憂湯(ボウユウトウ) (甘草湯カンゾウトウ)**は甘草一味を濃く煎じた液で(エキス剤の場合は湯に溶かす)、肛門を洗浄したり 温湿布したりすると薬になり、脱肛も治まるとされています。



6. **伯州散(ハクシュウサン) ***: 保険薬には記載されていないが鳥取地方の民間薬である、別名「外科倒し」といわれている。この薬があると外科が倒産するというほど昔から慢性化膿性疾患薬として使われているとのこと。ただし急性炎症に使うとかえって発赤腫脹や痛みを強くすることがあるので急性期には使ってはいけないことになっているようです。

(注*)印の薬方にはエキス剤はないので漢方医や漢方専門薬局などで煎じ薬などを求めることになる。

痔瘻の漢方治療

- ① 痔疾特効薬: 乙字湯
- ② うっ血型: 桂枝茯苓丸
- ③ 脱肛型: 補中益気湯
- ④ 痔出血: 急性期は黄連解毒湯
- ⑤ 痔出血: 中間期はきゅう帰膠艾湯
- ⑥ 痔出血: 遷延期は十全大補湯
- ⑦ 痔疼痛: 忘憂湯による局所洗浄
- ⑧ 全例 : 紫雲膏塗布

※きゅう帰膠艾湯の「きゅう」はくさかんむりに弓

漢方処方のまとめ

軽症のものは漢方薬を服用しながらしばらく経過を見てもよい。手術の適応にならない中等度以上のものは、激しいときには西洋薬を併用しながら漢方薬は長く服用して経過を追うと良いようです。

漢方薬は効果がでるまでに時間がかかる場合が多く、服用にて経過を見る必要がある。素人判断せず、漢方医や漢方に詳しい薬剤師に相談しながら薬と症状の相性や副作用のチェックをすることが重要である。各薬方のあとに〔出典〕を入れましたので参考にしてください。

参考資料

- 1 症候と疾患別漢方治療解説(39)痔・肛門・疾患
- 2 診断と治療 vol.84-No2 1996(115)277, (116)278 主な消化器疾患と漢方治療痔疾患
- 3 漢方の臨床 第52巻 第7号(2005)臨床薬剤師のための〈医療用漢方製剤の知識〉◎乙字湯
- 4 傷寒雑病論「傷寒論」「金匱要略」(増訂版)日本漢方協会学術部編
- 5 腹証図解漢方常用処方解説(新訂38版)三孝塾叢刊
- 6 『啓迪集』に学ぶ黄連解毒湯および組成生薬 日本漢方交流会雑誌「玉函」第26号
- 7 ト塾塾セミナー 傷寒論金匱要略 方術信和会